

講演

歯科界の将来に夢を

飯塚 哲夫

●抄 録●

今回の冬期学会のテーマは、「緊急提言、歯科界の将来に夢を」です。配布されている案内書の企画趣旨には、「医療費総額に占める歯科の割合は減少傾向に歯止めがかからず、歯科を希望する若者は減っているのが現状です。この状況を打破するには…」といった文章が見られます。

つまり、歯科界や歯科医師という職業に現在のところ夢や希望が持てないという認識を多くの歯科医師たちが持っているということでしょう。ですから、「この状況を打破するには（どうしたらよいか）」を考えることが「歯科界の将来に夢を」もたらすために必要なでしょう。そのためには、現在の歯科界が夢を持てない状況になっているという事実を目をそむけることなく、それを直視し、そのような状況がなぜ生じたのかを考える必要があります。

歯科界のこのような状況は近年になって出現したわけではなく、明治39年に歯科医師という職業が法的に確立された時からわが国の歯科界が本質的に内蔵している状況である、というのが私の考えです。つまり、かなり根が深い問題なのです。そのため、そのような状況の打破は、小手先の改革や小細工で達成できるものではないでしょう。しかし、将来に夢を持てる歯科界はぜひとも実現させなければなりませんし、それは決して不可能な目標ではないと思います。

わずか50分でこの大きなテーマにどこまで踏み込めるかが、今回私に与えられた課題であると考えています。

キーワード：歯科界の将来、歯科医師という職業

第45回冬期学会のテーマは、「歯科界の将来に夢を」です。このようなテーマを取り上げるのは、現在の歯科界が夢を持てるような状況にはないからでしょう。わが国の歯科界は、明治39年に歯科医師が法的に独立した職業になって以来今日まで、あまり夢を持てるような社会ではなかったという否定しようのない事実があるのです。

2011年4月号の「ZAITEN」という雑誌は歯科医という職業についての特集を組んでいますが、そこには次のような言葉が躍っています。「歯科医“自業自得”の生活難」「歯科大学、歯学部“強欲の果て”の経営危機」「歯科医“ワーキング・プア”の惨状」「貧乏歯科医の噂が受験生を萎えさせる」

次に2013年6月15日号の「週刊ダイヤモンド」を見てみましょう。この本も歯科の特集を組んでおり、そこには次のような言葉が並んでいます。「もうだまされない！ 歯医者者の裏側」「患者争奪！ 激化する治療費値下げ合戦」「歯医者者の泥沼」「歯医者、歯科大の末路」「治療費のカラクリ」「コンビニより多い歯医者。16軒に1軒が赤字。1日5軒廃業」

次は2013年7月号の「ZAITEN」ですが、その中



※冬期学会講師

(いづか・てつお)
医療法人善哉会口腔研クリニック
名誉院長

身は次の通りです。「歯科医“倒産ラッシュ”の悪夢」「歯科医が怯える“医療Gメン”の恫喝監査」「金融円滑化法終了で“歯科医院破綻”急増前夜」「歯科大学、歯学部“最終サバイバル”」

次は、2014年7月号の「ZAITEN」です。「厚労省は“医療政策上、歯科業界を蚊帳の外に置いてダメリットはない”と考えている」「厚労省は、2000年後半にはすでに“歯科棄民化政策”を取っている」「歯科医のワーキング・プア化が取り沙汰されたのは2007年以降だが、改善どころかむしろ悪化している」

これでもか、これでもかとの種の記事を書かれるとウンザリしますが、歯科医という職業が世間でこのような目で見られていることは認めざるを得ないでしょう。その結果、歯科医は、医師と比べると明らかに低い評価しか受けていません。平成4年3月11日第123回国会、衆議院予算委員会第4分科会で、時の厚生大臣山下徳夫氏は、次のような発言をしています。

「戦後間もなくのころからずっと見てみまして、前は歯医者さんのせがれが、ちゃんと立派な診療所があるにもかかわらず後継ぎをしないで、一般の医学部に行ったという例がもうしばしばでございました。私の知る範囲でそれは比較的少なくなって、まあたまにはありますけれども、それはそれだけ歯科医師の地位が高くなった。それは保険その他における収益の面から見ても同じと言いますか、かなり接近したと言いますか、いい線いっているんじゃないか。これは、そんなことを言うと叱られるかもしれませんが、そう思っております」

歯科医が一般の人々の間であまり良いイメージを持たれていないとか、医師と比べて評価が低いといった問題は、歯科先進国と思われているアメリカでも全く同様に見られます^{1, 2)}。つまり、歯科医という職業は、あまり夢が持てるような職業ではないようなのです。

その理由は、世界中の歯科医師は実は「歯科の医師」ではなくて「デンティスト」という職人（非医師）であり、世界中で行われている歯科医療なるものは実は「歯科の医療」ではなくて「デンティストリー」という非医療だからです³⁾。だから、デンティストを「歯科の医師」として見ると一般の人々には多少違和感があり、デンティストリーを「歯科の医療」として見る

と一般の人々には多少違和感があるのです。

世界中でデンティストは医師より社会的評価が低く、デンティストリーは医療よりも社会的評価が低いという厳然たる事実があるのです。そして日本の歯科医師たちもアメリカの歯科医師たちも、デンティストリーは医療ではないということや、医療よりも評価が低いということを、実は十分に承知しているのです。

日本では、明治39年の医師法制定時に、それまでは兎にも角にも一種の医師であった歯科医師が医師法の対象とはされず、その結果「医師」ではなくなりましたが、そのような状況を作り出す決定的要因になったものの一つに「歯科医論」という論文があります。この論文は1899年発行の「公衆医事」という雑誌の第3巻第8号に掲載されたもので、著者は東京帝国大学医学部卒で、その当時の超エリート医師です。この論文中には、次のような文章がみられます。

「歯科医は医師に非ず。一技芸家なり」「歯科医の技術に至りては、之を要するに填歯と言ひ抜歯と言ひ補歯と言ひのみ」「もし歯科医諸子にして眼科医産科医と比肩して自ら口内医たらんと欲せば、諸子は宜しく先ず医師より入るべきなり」

この文章は全体としてその当時の歯科医たちをかなり侮辱する内容だったため、日本歯科医学会の会員4名が同年発行の「医界時報、第284号」に「対歯科医論」という反論を發表しています。その中で著者らは、「歯科医学すなわちdentistryは、口科学すなわちstomatologyである」と書いています。しかし、1899年当時の神戸市の歯科料金表の項目は表1の通りです。つまり、その当時神戸市の歯科医たちはこの表にあるような仕事をしていたわけで、これはまさしくデンティストリーそのものです。それを「口科学すなわちstomatologyである」と強弁するのは、デンティストリーは口科学すなわち口腔の医療よりも低評価であ

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> *セメント充填、アマルガム充填 *総義歯、金床義歯 *金冠、継続歯 *金充填 *抜歯 *歯牙清掃 *治療（歯肉に薬物塗布） |
|---|

表1

ることを彼等が自覚しているからでしょう。

そのような事情は、アメリカの歯科医たちについても同様です。

アメリカ歯科医師会は1997年に「dentistryの定義」を定めて、それを公式に発表しました。その定義は、次のようなものです。

「dentistryとは、口腔、顎顔面領域、その近隣や関連構造の病気、機能異常、および人体に対するその影響などの評価、診断、予防、治療を行うこと」

これを「口腔顎顔面外科の定義」とか「口腔医学の定義」というならわからないことはありませんが、「dentistryの定義」と言われても納得する人はおそらくいないでしょう。この定義には歯冠修復や欠損補綴や歯列矯正などのいわゆるデンティストリーはその概念すら見当たりませんし、何よりも「歯」という言葉すらどこにも見当たりません。当然のことながらアメリカ医師会はこの定義に疑問を投げかけ⁴⁾、歯科界の内部からの批判もあります⁵⁾。

アメリカ歯科医師会の「dentistryの定義」は、アメリカ歯科医師会が、デンティストリーは口腔の医療よりも評価が低いことを自覚していることや、デンティストリーを「医療」として強弁していることを如実に物語っていると言えないでしょうか。

歯科医たちがデンティストリーを自己の業務としているかぎり、歯科医の社会的評価はあまり高くなく、歯科医たちは歯科界の将来に夢を持ってないでしょう。つまり、インプラントや審美歯科や、修復や歯列矯正などのデンティストリーは、それをどういじり回してみても歯科界の将来に夢をもたらすようなものではないということです。

歯科界の将来に夢をもたらすものは、歯科医たちが「歯や口腔の医療」を第一義的な業務と考え、デン

ティストリーを二義的な業務と考える存在になることです。前述した「対歯科医論」を書いた日本の歯科医たちも、「dentistryの定義」を定めたアメリカの歯科医師たちも、言外にそれをほのめかしているではありませんか。

それにもかかわらず、世界的に見てもこれまで歯科医たちがそのような存在になれなかったのは、それが法的にも社会常識的にも不可能だったからです。それは、デンティストの出自や来歴から考えれば明らかです。

しかし、アメリカにBaltimore College of Dental Surgeryが出現して以来医師たちが歯の医療から手を引き、それに伴って口腔の医療にも疎遠になりつつある現在、歯科医たちが「歯や口腔の医療」を第一義的な業務とすることが可能な状況が生まれつつあります。特にわが国は、他の国々と比べて歯科医の業務範囲が広く、したがって歯科医たちがその気になりさえすれば、わが国は、世界で最初に新しいそして望ましい歯科医師像を創り上げるのが可能な国だと思います。

今こそ、歯科界の将来に夢をもたらすものは何かを真剣に考えるべき時ではないでしょうか。

文 献

- 1) Thibodeau, E. Mentasti, L.: Who stole Nemo?, J.A.D.A., 138: 656-660, 2007.
- 2) Dentistry's public image: does it need a boost?, J.A.D.A., 118: 687-692, 1989.
- 3) 飯塚哲夫: 歯科医師とはなにか—歯科医師の歴史, 株式会社ストマ, 埼玉: 2008.
- 4) Cheifetz, I. D.: AAOMS challenges AMA data series comments on OMS, dentistry, J.A.D.A., 141: 617-618, 2010.
- 5) Ding, A.S.: Definition of oral and maxillofacial surgery. (Letters to the editor) OS. OM. OP., 87: 395, 1999.

What brings dream in the future in dental society

Tetsuo IZUKA, D.D.S., Ph.D.

Membre Associé Etranger de L'Académie Nationale de Chirurgie Dentaire

The theme in the 2015 winter meeting of International College of Dentists Japan Section is “ What brings dream in the future in dental society”. The reason why this theme is adopted may be that quite a few Japanese dentists are unable to have dreams and hopes currently in Japanese dental society. Consequently, it is imperative to consider how we can break down this situation. For that purpose, we should face up to the reality and inquire the reason why such situation was brought into existence in the Japanese dental society.

Such situation is not yielded recently, but has been long existing in Japan since 1906 when Japanese dentists were legally established as a profession. Accordingly it takes roots deeply in dental society in Japan. It means that it is impossible to break down such situation by handiwork or playing cheap tricks. However, we must build up dreamful dental society in Japan in the near future, and it is not an unrealizable target.

Key words : Japanese dental society, Dreamful dental society